

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(二)

植 木 久 行

●五〇番 白居易「落花」⁽¹⁾「留春春不住、春歸人寂寞。厭風風不定、風起花蕭索」

○大和三年(八二九)同五年(八三一)の初夏、作者五八
〜六十歳、洛陽での作(花房・朱『箋校』)。「抄注」に「五言
古調ノ詩ナリ」とある。白居易のいわゆる古調詩とは、「五
言古體詩のみを意味し、七言は排除した。七言という形式の
歌詩は、それがいかなる律調をもつものにして、唐代におい
て成立した近體の一、と見なされていた」(花房英樹「白氏文
集校訂餘録」)。

○「留春春不住」 五二番の上句の表現と類似する。

○「春歸」 中原健二「詩語『春歸』考」(『東方學』七五
輯、一九八八)には、ほぼ次のごとくいう(要約)。

「春歸」の語は六朝・梁のころから現われるが、六朝期

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

にはわずか七例しか見えない。しかもその意味はみな「春
歸來」、つまり春の到來を意味する用例である。ところが
中唐期になると、「春歸」の語は「春歸去」の意味でもし
ばしば用いられるようになり、春の終りを表す詩語の一つ
となった。これは中唐以降、傷春や惜春の情を歌う作品が
急増する現象と照應するものである。九例を使用した白
居易を代表とする中唐・元和期の詩人たちが、その詩語定
着への原動力となった。「春歸る」は「春去る」とともに、
春をあたかも人のごとく見なせるがゆえに、さまざま表
現の可能性をもつ。

なお、「歸」字が「歸來」「歸去」の兩意をもつ反訓詞であ
ることは、郭在貽「唐詩中的反訓詞」(『訓詁叢稿』上海古籍出
版社、一九八五所收)参照。

○「寂寞」 屈原の作とされる「遠遊」(《楚辭》所收)に、「山は蕭條として獸無く、野は寂寞として(其れ)人無し」とある。『私注』に「言ふところは、春盡くれば人出遊せず。故に《寂寞》と曰ふ」と。白居易「三月三十日に作る」詩(卷22、後集卷2)に、「今朝 三月盡き、寂寞として春事畢る」とある。

○「風不定」 「定」字は、風が静まりやむ意で頻用される。陳の謝貞が八歳のときに作った「春日閑居」詩(『南史』卷七四)に、「風定まるも花猶ほ落つ」とある。杜甫の「茅屋秋風の破る所と爲る歌」の「俄頃にして風定まり雲は墨色」は、その著名な用例。

●五一番 白居易「皇甫賓客に酬ゆ」「竹院君閑銷永日、花亭我醉送殘春」

○大和四年(八三〇)、作者五九歳、洛陽での作(花房・朱)。太子賓客分司に在任。詩題の「皇甫賓客」とは、同じく太子賓客分司の職にあった皇甫鏞(七六〇—八三六)を指す。皇甫は複姓。「俗縁を避け、幽獨を好む風趣高邁の士」であった(堤留吉『白樂天研究』春秋社、一九六九年刊、一八〇頁)。

○「竹院・花亭」 竹院とは、おそらく洛陽の宣教里(坊)

にある皇甫鏞の自宅(白居易「皇甫公墓誌銘」(卷61))を指さう。また花亭とは、白居易が約二十年間住み、終老の地とした履道里の自宅(長慶四年(八二四)、五三歳の秋、妻の遠い同族の楊憑の故宅(當時は田氏所有)を購入して、以後の生活の本據としたところ)を指す。宣教里と履道里は集賢里をはさんで並び、最短距離のところは約五〇〇メートル。東都分司の職は實務もほとんどなく、いわば名義のみの地位であった。しかし俸給はちゃんともらえ、仕事に拘束されない自由を楽しめたのである。

○「殘春」 衰殘する春の意。春のおとろえ、春の終りをいう。他方、「餘春」の語は、白詩のなかでは夏の初めになお見る春のなごりを意味し、初夏に用いた(平岡武夫「三月盡—白氏歲時記」)。ある種の痛ましさをこめて用いられる「くずれゆく春」(殘春)の語は、白居易の愛用語の一つ(波多野太郎「讀詞雜志」参照)。この意味で、川口譯「残り少ない春」(『文庫』本)や大曾根譯「暮れ残った春」は、原詩のニュアンスとかなり異なる。ちなみに、「殘」字は衰殘・凋傷が原義。「餘」や「留」の意はその轉義である。夏承燾「杜詩札叢」(白「用方言」の條には、「餘」の意味は「民間の方言」にもとづく用法とする)。

●五二番 白居易「三月三十日、慈恩寺に題す」「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黃昏」

○永貞元年（八〇五）の三月三十日、作者三四歳、都長安城内の慈恩寺での作（花房・朱）。校書郎在任。平岡武夫「三月盡―白氏歲時記」（前掲）には、「三月三十日」について、次のごとくいう。

唐代の曆では、三月は常に大の月とは限らない。小の月ならば、三月は二十九日に終る。したがって、白居易が三月三十日という時、彼は春が留ることの一日の長さをありがたいて喜ぶのである。三月盡は、大小いづれの月にも用いられるが、しかしそれ故に、三月三十日を特に提起して、その喜びを表現し、そしてそれを人に傳える力を、この言葉は欠く。

慈恩寺は、長安城内東南部にある晉^{（一作）}昌坊の東半分を占める玄奘ゆかりの大寺院。林泉形勝の地にあり、竹林におおわれ、牡丹・藤・蓮・柿などの名所であった。寺院は各地の良材を用い、「重樓・複殿、雲閣・洞房、凡て十餘院」（唐の慧立・彦棕著『大慈恩寺三藏法師傳』卷七）、あわせて一八九七間、その輪奐の美は古今に類いなしと評された。今日、大

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

雁塔がわずかながら唐代のおもかげを傳える。ちなみに、當時、白居易は永崇坊の華陽院に住んでいた（前稿二七番の詩参照）。慈恩寺のある晉昌坊は、この永崇坊の眞南、昭國坊をへだてたところであり、兩者の距離は一キロもない（最短距離のところは〇・五キロ強。「題す」とは、壁や屏などに詩歌や姓名を書きつけること、いわゆる題壁の風習である。鈴木修次『唐詩―その傳達の場』（日本放送出版協會・NHKブックス、一九七六）参照。慈恩寺におけるこの實態を傳える『慈恩雁塔唐賢題名』が残存する（殘卷二卷）。羅福頤「雁塔題名帖介紹」（『文物』一九六一年第八期）や『長安・洛陽物語』（前掲）一二七頁以下参照。なお慈恩寺については、小野勝年「長安の慈恩寺とその文化」（『龍谷大學佛教文化研究所紀要』十五、一九七六）や重光「唐大慈恩寺補記」（『考古與文物』一九八三年第二期）、『唐詩の風土』（前掲）三二頁以下、『長安・洛陽物語』一二三頁以下などを参照。なお、最近、小野勝年著『中國長安・寺院史料集成』（史料篇・解說篇、法藏館、一九八九年三月）の勞作が刊行された。

○「春歸」 五〇番の注参照。

○「紫藤」 白居易「宅を傷む」詩（『秦中吟十首』の一、卷二）に、「廊を繞るは紫藤の架」とある。

○「漸黄昏」 漸は、しだいに……なろうとする意。岡村繁『白氏文集』三（明治書院・新釋漢文大系、竹村則行執筆）には「漸は到と同義。……まで。當時の俗語」と注し、結句を「紫の藤の花の下に夕暮れまで立ちつくした」と譯す。これはおそらく、張相『詩詞曲語辭匯釋』卷二、漸(白)の條に、「漸猶到也、亦猶向也」とあり、姜夔「揚州慢」詞の「漸黄昏」を「猶云到黄昏也、亦猶云向黄昏也」と解釋する説を參照したものであろう。しかし本句はやはり、時間が「黄昏に向んとす」るなかで惜春の情がいよいよ深まりゆく、と餘情をたゆたわせた表現として理解すべきであらう。徐仁甫『廣釋詞』卷八の「漸猶_レ近_ク、副詞」の訓も參照されてよい（再友僑校訂本、四二六頁）。ちなみに、伊藤東涯『操觚字訣』卷九にいう、「昏ハ、日入りテ後、二三刻ノアヒダヲイフ。黄昏・定昏ノ別アリ（『淮南子』天文訓參照―引用者注）。タンガレ時也」と。

●六五番 元稹「早春 李校書を尋ぬ」「咽霧山鶯啼尙少、穿沙蘆笋葉纒分」

○元和五年（八一〇）～元和九年（八一四）、作者三三～三六六歳、江陵〔湖北省〕での作（花房・前川『元稹研究』）。江陵府

士曹參軍在任。江陵は前稿四五番參照。李校書は未詳。花房・前川『元稹研究』に收める「篇題に見える氏名」（二三〇頁）には、李校書を李紳とし、西岡市祐「新樂府」《上陽白髮人》の小序《愍怨曠也》^(?)についての注も同じである。しかし當時、李紳は大牛都長安に住み、江陵を訪れた形跡は全くない。詳しくは、卞孝萱「李紳年譜」（『安徽史學』一九六〇年三期）參照。この説はおそらく誤りであらう。この李校書は、元稹や李紳と親しい李景儉（字は寬中）のことか。當時、李景儉も江陵府戸曹參軍に左遷されており、元稹と意氣投合する。この推測が正しいとすれば、李景儉が江陵の地を離れたのは元和八年（八一三）の冬らしいので、本詩の作成推定期間は一年短くなる。ちなみに當時、元稹の家は江陵城外の長江のほとりにあった（王拾遺『元稹傳』（寧夏人民出版社、一九八五）參照）。

○「咽霧山鶯……」 『抄注』は「春アサクシテ 鶯ノコエ ナヲモノウシ」と説明し、「咽霧トハ聞ノカスカナル」こととする。「啼尙少」の「少」を、川口・大曾根注はともに「わかし」と讀む。この訓は、「早春の初め、鶯兒は嫩く轉る。故にへ鳴くこと尙ほ少し」と曰ふなり（『私注』）などとも關連するのであろう。しかし唐詩としては「少なり」と

讀むべきところ。この意味で、川口注に引く大江千里『句題和歌』（八九四年に成る）に、「鶯の聲のまれなる」と直譯するのが正しい。『集注』本も「マレナル」と讀む。そしてこの「少」は「まれにある」ではなく、むしろ「めったにない」と否定に重點を置いた表現。宇野明霞原撰・釋大典副補『詩家推敲』^{〔補注〕}卷下に「無ノ意ヲユルクイフ語」とする。なお山田孝雄校訂本（岩波文庫）では「スクナシ」と讀み、この訓のほろが「わかし」よりもよい。李紳の「早梅の橋」詩（過梅里七首）^{〔其五〕}に、「楊柳未だ黄ならず 鶯は舌を結ぶ（泣かない意）」とあり、白居易「南湖の早春」詩（卷11）に「舌澀りて黄鸝 語未だ成らず」とある。ちなみに、金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集—句題和歌・千載佳句研究篇』には、本句の文字の異同について次のごとくいう（藝林舎影印本、二五七頁）。

現行『元氏長慶集』に「帶霧山鷓啼尙小」と見えてゐる句題も、千里の翻案歌に「……霧にむすればや鳴鶯の聲のまれなる」とあるのをはじめとし、『千載佳句』早春・『倭漢朗詠集』鶯・『夫木和歌抄』鶯等の各部門では、何れも『句題和歌』春部第一歌の記載と同様に、「咽霧山鷓啼尙少」に作れるをすれば、當時に於ける傳本詩句の字面や形

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

態なども、或はこれによつて窺ひ知ることが出來よう。

○「蘆筍」 「蘆筍」と同じ。アシの芽を竹の子（筍）にたとえた言葉。筍は筍の俗字（『廣韻』上聲・十七準韻。元稹「生春二十章」其六に、「蘆筍 雖猶ほ短し」とある（卷15）。このほか、「蘆筍初めて生じて漸く齊しからんと欲す」（張籍「涼州詞」）、「南塘 水深くして蘆筍齊し」（張籍「江村行」）、「蘆筍 丹漬（あかいぬれた色）を抽きんず」（李賀「昌谷詩」）などの用例がある。

○「纜」 僅かにの意。

●六六番 白居易「思黯が自ら南莊に題して示さるるに和し奉り、兼ねて夢得に示す」「臺頭有酒鶯呼客、水面無塵風洗池」

○開成三年（八三八）の春、作者六七歳、洛陽での作（花房・朱）。太子少傅分司在任。「思黯」は牛僧孺（七八〇—八四八）^{〔9〕}のあざな。堤留吉『白樂天研究』（前掲）一六一頁にいう、

牛僧孺は白樂天およびその周囲の文士たちの庇護者である。もし裴度を文學方面の庇護者とすれば、牛僧孺は李宗閔らとともに政治方面の庇護者といつてよからう。

周知のごとく、牛僧孺は、李德裕一派と對立した、いわゆる牛李の黨争の、一方の旗頭であった。白居易は牛僧孺にとつて、元和三年の制科に及第したときの考官の一人でもあった。「見示」の「見」字は、動詞の前に添えられ、わが國の「る・らる」に似て、受身と尊敬の意を兼ねる。ここは、相手の動作に添えられた敬意を表す用法。小川環樹『唐詩概説』(岩波書店・中國詩人選集別卷)の附録「唐詩の助字」の條に、「見はおおむね動作の主動者に對する敬意を表わす。被は敬意を含まず、かえつて損害を受ける意が含まれることがある」と指摘する。この敬意を示す「見」の用法に對し、「奉和」の「奉」字は自分の行動を表す動詞に添えて謙讓の意を表す。なお、田中謙二『樂府 散曲』(筑摩書房・中國詩文選)九三頁や、戸田浩曉「妙法蓮華經『見』字訓讀考」(汲古書院刊『中國文學論考』所收)、松尾良樹「鳩摩羅什漢譯佛典の口語について」(一九八六年五月三一日、東北中國學會における口頭發表のレジュメ資料)など參照。

「夢得」は劉禹錫のあざな、彼も當時、太子賓客分司として洛陽に滞在した。川口注に、「思黯は牛氏、楊州の節度使、南莊は南のかたの別莊」とあるが、この説明は不明瞭で誤解を生じやすい。この詩の作成當時は、牛僧孺は檢校司空・東

都留守として洛陽におり(郁賢皓『唐刺史考』(2)、四八三、四頁參照)、揚州とは全く關係がないからである。このときの牛僧孺の東都留守在任期間は、開成二年(八三七)五月、開成三年八月。詩の作られた開成三年當時、牛僧孺は五九歳。詩題の「南莊」とは、洛陽城南郊外の別莊を指す。彼は當時、南莊を設けたばかりであつたらしい。この南莊はまた、杜牧の「牛公墓誌銘并序」に「大中二年十月二十七日、東都の城南の別墅に薨す」と見える、その城南別墅に相當しよう(王夢鷗「牛僧孺的政治生涯考述」參照)。劉禹錫の詩(和思黯憶南莊見示)に「丞相の新家は伊水の頭はとり」とあり、別の劉禹錫の詩(和牛相公遊南莊、醉後寓言、戲樂天、兼見示)に「城外の園林 初夏の天」と歌われている。つまり、その南莊は洛陽城南郊外を流れる清流「伊水」のほとりにあつた。卞孝萱『劉禹錫年譜』(中華書局、一九六三)の開成三年の條參照。中唐期、大官や富豪は、長安や洛陽の郊外に粹を擬らした別莊を營み、友人たちを招待して酣歌した。とりわけ安史の亂後、すっかり退老の地と化した洛陽の場合、この傾向が著しい(『唐詩の風土』第二章、洛陽參照)。洛陽の城南の場合、この南莊のほか、裴度の午橋莊(綠野堂)や李德裕の平泉莊などが有名であり、前者の午橋莊も南莊・城南莊などと呼ばれている(市

原亨吉「東都留守時代の裴度の生活」〔前掲〕参照。加藤繁「唐の莊園の性質及び其の由來に就いて」〔支那經濟史考證〕上、東洋文庫、一九五二年）にいう、

唐代において莊・墅・別業などと呼ばれたものは、王公百官富豪などの別莊で、其の中、城外に在るものは、大抵花木泉石の外、廣大な田園を含んで居た。

ちなみに、日野開三郎『唐代先進地帯の莊園』（自家版、一九八六）六二頁には、「莊」の語には、(1)別莊の建物莊館、(2)この別莊を含んで廣く築造せられていた墻堵内、(3)莊園全體、をそれぞれ指す三種の用法があると指摘する。

〔臺頭〕 南莊中の樓臺のそば、というよりも、むしろ樓臺のなかの意か。詩中の「頭」字はきわめて柔軟性にとみ、上・中・下・邊・前などの方位を表しうる。これはおそらく、「頭」の字が、漠然と場所を表すにすぎない軽い名詞語尾と化した實態と関連しよう。詳しくは、王鏊『詩詞曲語辭例釋』（増訂本）参照。

○〔鶯呼客〕 『私注』に「鶯を翫び〔て〕客來る。故に〈客を呼ぶ〉と曰ふなり」とある。

●六七番 白居易「春江」〔鶯聲誘引來花下、草色拘留坐水

〕『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

邊

○元和十五年（八二〇）の春、作者四九歳、忠州（四川省忠縣付近）での作（花房・朱）。忠州刺史在任。「春江」は春の長江。その北岸に忠州の治所があった。同じ忠州での作「巴水」（卷18）に、「城下 巴江の水、春來れば麴塵に似たり」と歌う。忠州は長江の三峽地帯よりやや上流、重慶の下流にある山峽の「蠻地」。風俗は中原のそれと異り、氣候は陰天の日が多くて暑かった。白詩（自江州至忠州）詩、卷11）の表現を借りれば、「窮峽 巔山の下」にあった。白居易が江州司馬から忠州刺史へ昇進できたのは、舊友の宰相崔群の配慮による。また別の白詩（初到忠州贈李六、卷18）に「百層の石磴 州門に上る」と歌われるごとく、高い石段をのぼったところに州廳の門があり、平地は少なく、舟が交通手段であった。なお堤留吉『白樂天研究』三四三頁参照。

○〔鶯聲誘引〕 白居易「春暖」（卷37、後集卷16）に、「鶯に留められて花下に立ち、鶴に引かれて水邊に行く」とあり、李益の「又た劉濟に獻ず」詩に「鶯聲に引かれて獨り遊ぶ」とある。

○〔草色〕 同じ忠州での作「春に感ず」詩（卷18）に、「草は青し 水に臨む地、頭は白し 花を見る人」とある。

○〔鶯聲・草色〕 王力『漢語詩律學』一六七頁には、同じ門類（部門）から成る言葉、たとえば「歌舞」「聲色」「心跡」「老病」などを、もし對句内に分けて用いるならば、最も巧みである。

として、この白詩の二句を例にあげる。

○現在、忠縣には、白居易を記念する「白公祠」が縣城の西一・五キロの地にある。もと明の崇禎三年（一六三〇）に建てられたが、文革期に破壊され、現在再び修復・増築されている。詳しくは王如陽「忠縣白公祠」（『四川文物』一九八八年第二期）参照。

●七五番 白居易「早春 蘇州を憶ひて、夢得に寄す」「霞光曙後殷於火、草色晴來嫩似烟」

○大和八年（八三四）、作者六三歳、洛陽での作（花房・朱・王）。太子賓客分司在任。松浦友久「憶君遙在瀟湘月―離別詩における時間の表現」には、「憶」字について次のように、

一般に「憶」の字は、「念也」（『廣韻』職韻）、「思也」（『集韻』職韻）のように、「念」や「思」と置き換えられることが多いが、實際の用例としては、ほとんどすべてが

「おぼえている、おもいだす」といった意味に限定されており、何らかの意味で、必ず過去の事象とかかわっている。従ってこの點では、「おもう」の一般的用語としての「思」よりも、「常思也」（『説文』卷十下）、「謂長久思之」（『說文通訓定聲』臨部第三）と説明される「念」のほうが近いと言えよう。ただ、中世古典詩での用例から見れば、「念」がより多く「自覺的に思いつづけている」という傾向をもつのに對し、「憶」は、より多く「潜在している記憶を憶い起こす」という傾向をもっているようである。

本詩の場合、蘇州刺史在任期間（八二五年三月～翌年八月）の記憶―七、八年前のそれをおもい出す意。作詩當時、親友の劉禹錫（字夢得）が蘇州刺史であった。

○〔霞光〕 『釋名』の逸文に「霞は白雲 日光に映されて赤色を成す。日の赤き光を假りて成るなり」とあるごとく、かがやく紅い雲氣の意。この場合、朝やけ（朝霞）を指すが、白居易の「天宮閣、秋晴晚望」詩（卷34、後集卷15）に「霞光紅にして泛艶たり」とあるのは、夕やけ（暮霞）の例。劉禹錫の詩（闕下接傳點、呈諸同舍）にも、「霞光泛艶たり 翠松の梢」とある。白川靜『字統』（平凡社刊）には、「煙

霞・霞光の美しさが文學作品にあらわれるのは六朝期に入つてからのことで、南方の風物が紋景への道を開いた」と指摘する(八二頁)。ちなみに、わが國でいうカスミは、中國の「煙霞」の語に相當するとは、符谷掖齋『箋注倭名類聚抄』卷一、霞の條にみえる説。

○〔曙後・晴來〕 「後」と「來」の字は、時おり互文互用される。白居易「舟中夜坐」(卷28、後集卷10)の「潭邊霽後、多清景、橋下涼來、足好風」や同「曲江早秋」詩(卷9)の「早涼晴後、至、殘暑暝來散」などは、この例である。また陸龜蒙の詩(「京口與友生話別」)に、「木隆涼來、葉、山橫霽後、嵐」という。こうした「來」字は、「後」の意。太田辰夫『中國語歴史文法』(朋友書店、一九八一年影印本)によれば、「來」字には唐代、設想・假定・條件などを表す用法が生じ(二二一頁)、「後」の字も唐宋のころ、「くすると」「くしてしまふ」という假定の用法が生じた(三五八・三七三頁)とする。なお王鈔『詩詞曲語辭例釋』(増訂本)一四〇頁も参照。

○〔殷〕 深紅の色(殷紅の紅)、音はアン(『廣韻』上平・二八山韻)。

○〔嫩〕 川口注に「永亨本『嫩』を『嬾』に作り、『嬾』(もの)くして烟に似たり」と訓むのは誤り。いま柿村本の訓み

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

に從う」とある。唐代の寫本では、「嫩」を「嬾」と混用する。「嬾」の字はこの嬾字の訛であろう。慶長五年耶蘇會板『倭漢朗詠集』の釋文には、確かに「嬾」に作る(もと行書體。京都大學國文學會刊、一九六四年)。任半塘『敦煌歌辭總編』(上海古籍出版社、一九八七)一五九頁参照。

○〔嫩似烟〕 この訓讀は、(a)「烟よりも嫩し(川口注本)」、(b)「嫩くして烟に似たり」(大曾根注本)の二種に分かれる。後者がより一般的な訓讀ではあろうが、本詩句が七言律詩の領聯の對句を構成することを考えれば、(b)は唐詩の讀みとしては誤訓に近い。この「似」は、上句の「殷於火」の「於」字と對をなす比較の助字(『詩家推蔽』卷上參照)、『私注』も一〇四番の同例を參照すれば、「於」と同じく「ヨリモ」と讀むらしい。『白氏文集』には、一〇四番をはじめとして、「似」と「於」を互用した例が多い。たとえば、「新たに布裘を製る」詩(卷1)に「桂布白似雪、吳綿軟於雲」(上句の訓：桂の布は雪より白し)とあり、「日高くして臥す」詩(卷28、後集卷10)に「夾幕繞房深似洞、重裯襯枕暖於春」(上句の訓：夾幕は房を繞りて洞よりも深し)などとある。田中謙二「元代散曲の研究」(『東方學報』京都第四〇冊、一九六九)の注、「強似」の條には、「俗語の場合、形容詞十如(似)はみな比較

級に解する」という。なお香坂順一『白話語彙の研究』(光生館、一九八三)の「中國近世語ノート」(一七二)「似」の條参照。

「嫩似烟」の意味は、柿村『要解』に「若草が晴日に打烟つて居ること」とある。釋慈周『葛原詩話後篇』卷一には、

嫩ハ正シク嬾ニ作ル。「奴困ノ切、弱也」「廣韻」去聲・二十六韻ト注シテ、モノノ「ワカキ」意ニ用ユ。故ニワカクサヲ嫩草ト云フ。轉ジテ早涼ヲ嫩涼、初寒ヲ嫩寒ト云フノ類、ミナ「ワカキ」意ナリ。

という(表記の一部を改める)。川口本には、「萌え出た草の緑は、一面にうちけむって煙よりもやわらかにわかい色だ」と譯する。この「嫩」は、「嫩葉」「嫩草」の用例のごとく、生じたばかりの若葉や若草特有のしなやかさ、よわよわしさ、みずみずしさなどを意味するが、同時にまた、色彩面における「淺淡」の意味も内包しよう。たとえば、「嫩綠」「嫩黃」といえば、淡綠色・淡黄色を意味する。このことは、白居易の「燕子樓三首」其二(卷15)に「鈿曇りて羅衫の色は烟に似たり(うすぎぬの上着の色があせる)や、溫庭筠「更漏子」の「眉淺くして澹煙 柳の如し」(かきまゆの色が淺くうすれて、あわいもやにつつまれた柳「の葉」のよう)の表現と關連つけて

考えれば、一層理解しやすしい。

草を煙にたとえる表現は、唐詩中に頻見する。⁽¹⁴⁾たとえば、白居易の「書に代ふる詩一百韻、微之に寄す」詩(卷13)に、「岸草 烟 地に鋪き、園花 雪 枝を壓す」とあり、李益の詩(鹽州過胡兒飲馬泉)に、「綠楊は水に著き 草は煙の如し」などとある。この二例はいずれも早春の用例であるが、劉禹錫の詩(和牛相公遊南莊、醉後寓言、戲樂天、兼示兒)に、「水底の遠山は雲 雪に似たり、橋邊の平岸は草 煙の如し」は、初夏の用例である。ちなみに、五代・歐陽炯の「南郷子」には「嫩草 煙の如し」という。これらの用例は、おもに、色淡い若草が煙のごとく一面にかすみつつ、あたりをおおう描寫であるが、『私注』には「艸は其の色綠、故に烟に喩ふ」と指摘する。本詩句では、こうした常套表現を意識しつつ、單なる比喻から比較へと轉じた點が斬新ですぐれる。萌え出た若草の淺黄色がいちめんにつむって、煙よりもやわらかで淡い、というのである。數年前の蘇州における楽しい思い出とからみあって、より一層甘美な表現へと昇華したようである。

● 八一 錢起「闕下の裴舍人に贈る」「長樂鐘聲花外盡、

龍池柳色雨中深」

○本詩は、頸聯の「窮途の恨み」や尾聯の「賦を獻じて十年猶ほ未だ遇はず」の語によれば、天寶十載（七五一）、進士及第以前の作。高木正一『唐詩選』四（朝日新聞社・文庫本）に、「賦を獻ずとは、……ここでは、科擧に應じて及第したことをいうか」とするが、従いがたい。單に科擧を受験したことをいう。⁽¹⁶⁾ 謝海平「錢起事蹟及其詩繫年考述」〔『中華學苑』第三四期、一九八六〕にみえる生没年の新説（七一七生、七八三没）にしたがえば、天寶九載二月、作者三三歳以前の作。なお傅璇琮「錢起考」〔『唐代詩人叢考』中華書局、一九八〇年所收〕の「七一〇生、七八〇没？」説は、謝の説よりも劣る。ただし、謝の説自體も、まだ推定の域を出ていない。

錢起は、本詩によれば、開元二九年（七四一）ごろ、すでに都長安にきて進士科を受験したが、長く落第しつづけていた。この詩は、中書舍人（？）の裴某に、自分の推擧を依頼した詩である。當時、本人の實力以外に、著名な高級官僚や王公貴人の推薦の有無が、進士科の及落に大きな影響を與えた。いわゆる行卷の風習は、このことと關連する。⁽¹⁷⁾

「闕下」とは宮闕の下、すなわち朝廷を指す。裴舍人は未詳。東裝『唐詩正聲箋注』卷十五に引く『唐詩集註』には、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

「『唐書』に、裴夷直は吳の人。仕へて中書舍人と爲りし時、仲文〔錢起の字〕未だ〔及〕第せずして裴の引薦を欲するなり」とある。しかし、裴夷直の進士及第は元和十年（八一五）であり、その中書舍人就任は、當然これ以後のはずである〔『新唐書』卷一四八、張孝忠付傳參照〕。したがって、その誤りは明白であろう。ちなみに、柿村『要解』にいう、

詩題の裴舍人は「千載佳句」春興部にも「私註」以下にも「閨舍人」^{〔補b〕}とあるから、我が所傳は閨舍人で、之れに従ふべきであらう。

この閨舍人も、誰を指すか未詳。

○「長樂鐘聲」長樂宮は前漢の都長安城内の東南部にあった宮殿。『長安・洛陽物語』三六頁の地圖參照。大曾根注に、「漢の高祖が長安に都した時建てた宮殿」とするが、じつは秦の離宮「興樂宮」を改築して長樂宮と命名したものである。陳直『三輔黃圖校證』⁽¹⁹⁾卷二や『太平寰宇記』卷二五參照。長樂宮の鐘聲は、徐陵撰「王臺新詠の序」に「長樂の疎鐘を厭ふ」とあり、唐詩のなかにも、「長樂の宵鐘盡く」（沈佺期「和韋舍人早朝」）、「長樂疎鐘を聞く」（李白「夕霧杜陵登樓寄韋絲」）などと用いられる。また戴叔倫には、「曉に長樂の鐘聲を聞く」と題する詩がある。本詩の用例はもちろん、

「借りて唐宮を喩ふ。漢の故宮を指すに非ざるなり」(高步瀛『唐宋詩學要』卷五)。宮中で鳴る鐘聲を「長樂の鐘」と明言した用例としては、劉禹錫の「元和甲午の歲(九年)、詔書もて盡く江湘の逐客を徵す。余は武陵より京に赴き、都亭(皇城「官廳街」の南の通化坊にある都亭驛⁽²⁰⁾)に宿し、續いて來る諸君子を懷ふ有り」という詩に、「十年楚水楓林下、今夜初聞長樂鐘」とある例を指摘できる。都亭驛に宿した作者が、久しぶりに宮中からもれ傳わる鐘聲を聞いた感慨を歌う。

鐘を鳴らす意圖について、『抄注』は「トキ(時)ニツタカヒテ、コレヲウツ」とする。本詩の第二句「春城紫禁(一作)曉に陰陰たり」によれば、東の空の白みはじめる五更の描寫であり、曙よりも少し前の時間帯を指す。當時、都長安では、祕書省太史局内の漏刻(水時計)で時刻を測定した。

『舊唐書』卷四三、職官志、祕書省の條には、

毎夜、分ちて五更と爲し、每更(更ごとに)分ちて五點と爲す。更は鼓を撃つを以て節と爲し、點は鐘を撃つを以て節と爲すなり。

と注される。また『大唐六典』卷一〇、祕書省太史局の條には、さらに漏鐘や漏鼓を撃つことを掌る「典鐘」「典鼓」と

呼ばれる人々が多数(それぞれ二八〇人、一六〇人)いたことが記される。とすれば、詩中の「鐘聲」とは、具體的には典鐘が撃ちならす五更四點前後の曉鐘であろうか。『大唐六典』卷八、城門郎の注には、「承天門(太極宮の正門)にて曉鼓を撃つ。鐘を撃つを聽きて、後一刻(十五分弱)、鼓聲絶え、皇城(官廳街)の門開く」云々とある。ちなみに、承天門上で連打される曉鼓は五更三點に始まる(仁井田陞『唐令拾遺』宮衛令第十五)。ところで、曉鐘はまた、岑參の詩(奉和中書賈至舍人早朝大明宮)の「金闕の曉鐘、萬戸を開く」という句を思い起こさせる。岑參詩のそれは、じつは諸門が開かれることを報ずる「曉鼓(寸暮鼓)」と同意であり、内外の百官にとつては一日の仕事の開始を告げていた。林立平「試論鼓在唐代城市管理中的作用」(『中華文史論叢』一九八七年第二・三期合刊)など参照。

○「龍池」 都の興慶宮内にある池の名。興慶宮のある場所には、もと睿宗の五王子の邸宅が置かれ、即位前の玄宗も、その一人として住んだ。池の水面にはいつもめでたい雲氣がただよい、黄龍が現われた。この祥瑞は、王子の一人にすぎなかった玄宗がやがて天子となる兆しと考えられたことにもとづく。川口・大曾根注は、ともに興慶宮を「玄宗皇帝

が遊んだ」ところと説明するが、やや不適切である。玄宗は開元十六年（七二八）以後、朝廷をここに移して政務をとった。いかえれば、興慶宮は一時的ながら大唐帝國の政治の中心となったところである。平岡武夫『長安と洛陽―地圖』解説（唐代研究のしおり第七）の六〇頁や『唐詩の風土』二一頁参照。ただし、詩中の「龍池」は、宮中の池を廣く指す廣義の用例である。王涯「宮詞二十七首」其十五に「春花」又た深宮の石渠の裏に落ち、盡く流水に隨ひて龍池に入る」や、溫庭筠「楊柳枝八首」（其四）に「曉來 更に龍池の雨を帶び、半ばは闌干を拂ひ 半ばは樓に入る」なども、宮中の池を指す廣義の用例と考えてよい。この意味で、『六注』に「龍池ハ内裏ナトノ池ナリ。内裏ヲハ龍闕トモ云フ、鳳闕トモ云フ也。凡ソ國王ヲハ龍・鳳ニ類ヘル故也」とあるのが注目される。

川口注に、「安祿山が魚龍をここ（興慶宮を指す―引用者注）に獻じたという」（『文庫』本も同じ）とあるが、論據未詳。これはおそらく、安祿山が白玉石（大理石）製の魚・龍などを獻上した華清宮（長安東郊外の離宮）と混同したために生じた誤りであろう。唐の鄭處誨『明皇雜錄』卷下参照。

○唐の高仲武『中興間氣集』卷上には、この二句を、「特

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

に意表に出づる」名句の一つと評する。

●八七番 白居易「春至る」 「白片落梅浮澗水、黃梢新柳出城牆」

○元和十五年（八二〇）の早春、作者四九歳、忠州での作（花房・朱）。忠州刺史として赴任してきた翌年の春の作。したがって、川口注が「春 香山寺に至る」と題する『私注』を紹介するのは、もちろん不適切。香山寺は洛陽城の南郊にある。

○「黃梢新柳」 川口注に「黃梢」を「黃綠色の若芽の出た柳の枝」、大曾根注に「柳が芽ぐんで黃綠色を帯びた枝」とするが、やや疑問。早春、穂形の黄色い花につつまれた柳の梢をいうであろう。杜甫の「曲江にて鄭八丈南史の飲に陪す」詩の「雀は啄む 江頭 黃柳の花」に對する清の顧宸の説（『詳註』卷六所引）に、「柳始めて嫩蕊を生ずるや、其の色は黃。故に『黃柳』と曰ふ。未だ葉あらずして先づ花さく。故に雀は之を啄む」とある。これは、すでに四五番の補訂のなかで言及した早春の「柳花」（葉間に生じて）種を成し、鵝黃（やわらかい淡黄色）を作す者）を指し、晩春のいわゆる柳絮ではない。溫庭筠の「柳に題す」詩に、「楊柳千條 面を

拂ふ絲、綠烟、金穗、吹に勝へず」とある。篠田統「麴塵——風俗史における漢字の問題」⁽²⁷⁾には、次のようにいう、

季候が大陸性の北シナでは冬から夏への移行が急激なので、柳も日本のように葉が芽ばえてくる「青柳の糸」を賞美するのではなく、丁度ネコヤナギがたけたように柳の花（雄蕊）が眞黄色になった、そのころを初春の景物として喜ぶのである。

篠田統はまた、「唐詩植物釋」⁽²⁸⁾の楊柳の條で、より詳細に「柳花」を説明する。

冬の間は霜がれて黒褐色にくすんでいた枝が、春になって、四日目や五日目ごとに黄塵の間からふんわりと姿を見せる。それがそのたびごとに色調がかわり、やがて褐色から黄褐色、末には目もあやにあざやかな黄金色になる。早春のヤナギの色は、北シナでは、あざ緑ではなかったのだ。

……なぜこのように美しい黄金色になるのかと木の下までいって見あげてみると、これは葉ではなく、みんな花だった。ちょうどわが國の初春にネコヤナギがまっ白な花芽をだす。これが一面に雄蕊でおおわれ、そのまた雄蕊が眞黄色に花粉でそめられるころには、あざみどりの新芽もいっぱいふいてくるので、遠目には美しい黄緑色にはなる

が、黄色はそんなに目だたないけれど、氣候の移り變りのはげしい北の國では、ある時期には花ばかり、つぎの時期には新芽ばかりとホップしていくので、その黄金色を十分タンノウでできるといわけだ。

白詩の歌詠場所「忠州」（四川省）は華中であって、華北（北中國）ではない。しかし「黄梢柳枝」の的確な説明として、充分傾聴に値しよう。ちなみに、白居易の「郡齋の暇日に、常州の陳郎中使君が早春の晩に水西の館に坐し……」という詩（卷8、後集卷1）には、「波は黄柳の梢を拂ひ、風は白梅の朶を揺かす」とある。

○「潤」 『六注』に、「凡ソ谷ト云フ字ニ、アマタアリ。溪ノ字ハ水ヲ、キタニ、潤字ハ水少キタニ、谷ノ字ハ水ノ無キタニ也」とある。

●八八番 章孝標「早春初めて晴る 野宴」「梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中」^(補C)

○「帶雪・和煙」 比喩説（『六注』『抄注』）と實景説（『新釋』『考證』）の二種の解釋がある。『抄注』は「和煙」について、「ケフリ（煙）ハアヲ（青）キモノニイヘハ、柳ノ色ヲ煙ニナスナリ」とする。また同書は、上句の發想の根底に「落

梅ノ曲「白雪ノ曲」という琴曲が存在することを指摘する。他方、實景に立つ『考證』は、「其の梅花帶雪といへるは早春雪降りし後なればなり。其の柳色和煙といへるは天氣初めて晴れし時なればなり」として、詩題に即した理解を示す。ところで、川口譯には、「梅の花びらが白雪のごとくに散つて演奏する琴の上に舞い飛ぶし、芽を出したばかりの柳のみどりは野邊のかすみととけ合つて、酒盃のなかに映ることだ」とあり、上句の「帶雪」を比喻、下句の「和煙」を實景として捉えるようである。しかしこの譯は、對偶表現から考えてやや違和感をおぼえる。比喻説に立つ『抄注』は、下句を「ヤナキナントノアラムアタリニテ、サケラクメハ、ミトリ(綠)ノ色ノサカツキニウカフ意也」と解釋する。青煙・綠煙の語と關連づけたこの説にも、にわかには賛成しがたい。實景説の場合には全く問題ないが、假りに比喻説にしたがうならば、李賀「野歌」に「寒風又た變じて春柳と爲る、條條みすず看則みすず(みるみるうちに)煙濛濛たらん」とある句が参考になる。清の王琦『李長吉歌詩彙解』卷四に、

條條、柳枯無葉之狀。煙濛濛、綠葉初生、望之有若濛濛煙護之狀。

と注されるごとく、新葉につつまれた柳の枝がもやもやと淺

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

黃色にけむる姿、いいかえれば、芽ばえはじめた早春の柳が、淡い黄綠色のもやにおぼろにつつまれているように見える狀況こそ、「柳色は煙のやう」(柿村『要解』の意味するところではないか。³⁰)。ちなみに、溫庭筠「菩薩蠻」に「江上の柳煙の如し」という。

孟浩然の「姚使君に陪して惠上人の房に題す」詩には、

帶雪梅初暖 雪を帯びて 梅初めて暖かに

含煙柳尚青 煙を含んで 柳尚ほ青し

とあり、章孝標の二句を理解する参考になる。また、「帶」と「和」の二字が互文互用された例としては、魚玄機の「新及第の悼亡の詩に和す」詩の「一枝月桂和煙秀、萬樹江桃帶雨紅」、韋莊の「劉得仁の墓」の「桂和秋露滴、松帶夜風吟」などがある。

●九六番 「早春 李校書を尋ぬ」「梅含雞舌兼紅氣、江弄瓊花帶碧文」

○本詩は、六五番に前出。

○「鷄舌」 香料の名。丁香とも、母丁香のことともい

う。『重修政和經史證類備用本草』卷12、木部・上品、鷄舌香の條には、『唐本注』(唐の蘇敬等撰「新修本草」)を引いて

「花は梅花の如し」といい、その産地は崑崙(東南アジア)や交州・愛州(ともにベトナム北部)以南であるという。詳しくは、狩野椽齋『箋注倭名類聚抄』巻六、薰香具、鷄舌香の條など参照。白居易の「渭村に退居し、禮部の崔侍郎(群)・翰林の錢舍人(徵)に寄する詩一百韻」(巻15)には、「對して鷄毛の筆を乗り、俱に雞舌の香を含む」とあり、同「湖上醉中、諸妓に代りて嚴郎中(休復)に寄す」(巻20、後集巻5)にも、「鷄舌 含むこと多くして 口厭くや無や」の句がある。これは、三省(中書・門下・尚書)の郎官が、上奏や應答のさい、口氣をかぐわしくするために鷄舌香を口に含んだ故事(32)もとづく。當時の官僚にとつて、きわめて身近な香であつたらしい。(33)

○「瓊花」 『六注』に「瓊ハ玉ト讀ム也」とある。李廷先「揚州瓊花考辨」(『學林漫錄』六集、一九八二年所收)には、ほぼ次のごとくいう(要約)。

瓊花は揚州の産として名高く、大きな木に清らかな白い花をたくさんつける。一説に、唐代、都長安の集賢院や翰林院、安業坊の唐昌觀の名花として知られた玉蕊花のことともいう。

玉蕊花の名は、晩春から初夏にかけて白玉のような純白の

花が咲くことに由来する(34)。なお『廣群芳譜』巻三七、瓊花の條参照。俞平伯『唐宋詞選釋』(人民文學出版社、一九七九)一七六頁によれば、瓊の字は『説文』(巻一上)に「赤玉なり」と訓ずるが、後には多く白玉の意で用い、しかも潔白なさまを示す修飾語になるといふ。ただし、段玉裁は『説文解字注』のなかで、「赤玉也」の本文は「赤玉也」(亦玉なり)の訛であると見なす。他方、桂馥『説文解字義證』では、「赤玉」の二字は「盞」(玉の意)の一字が誤つたものという。ちなみに、瓊花は、のち「雪(片)」の別名としても用いられた(35)。要するに、瓊花は白玉のような純白の花と考えてよい。『新釋』に、「こゝは水上の泡、或は波の花を喩へたるなり」とある。

○「帶碧文」 『六注』に「帶トハ兼ル義ナリ」とある。『元稹集』巻18には、三字を「散綠紋」に作る。「帶」と「散」では、「散」の字(綠の波紋がちりぢりに四方に分かれ広がる)がすぐれているようである。

●一〇二番 白居易「天宮閣の早春」「林鶯何處吟箏柱、墻柳誰家曝麴塵」

○大和六年(八三二)、作者六一歳、洛陽での作(花房・

朱)。河南尹在任。天宮閣について、川口注は『考證』の説を踏襲して「河南にある道觀」(『文庫』本も同じ)とするが、誤り。天宮閣は洛陽城内の尙善坊(天津橋の南)にある佛教の名刹「天宮寺」の樓閣を意味し、道觀(道教の寺院)ではない。北宗禪の巨匠神秀や華嚴和尚などが一時住した寺院である。わが智證大師圓珍も、入唐求法の歸途、ここを訪れ、山門の樓上に登っている。⁽³⁶⁾詳しくは、拙稿「洛陽の名刹《天宮寺》をめぐる」(『東方』七四、一九八七年五月刊)参照。寺のある天津橋附近は、東都洛陽を代表する景勝地の一つ。⁽³⁷⁾

○「吟箏柱」 『箋注倭名類聚抄』卷六の考證によれば、箏はもと五弦、魏晉以後は十二弦、隋唐時代は十三弦になったという。『私注』に「青鶯の曲有り」といい、『六注』には「鶯ノ音ハ〔箏ノ〕琴ニカヨフト云事ノ有也」という。唐の崔令欽『教坊記』は、「春鶯轉」の由来を説明して、「高宗 聲律を曉る。晨坐せしとき、鶯の聲を聞き、樂人の白明達に命じて之を寫さしむ」という。詳しくは、任半塘『教坊記箋訂』曲調本事の條参照。

○「麴塵」 塵は麴〔麥粉を主體〕に生じるカビの胞子を指す。『抄注』に「キ(黄)ナルイロナリ」(二二番の注)とあり、『六注』には「モヨキ(萌黄)ノ糸ト讀(ム)也」という。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

淺黄色・淡黄色の比喩となる。篠田統『中國食物史の研究』(前掲)四四〇頁には、麴(酒母)について、次のようにい

う、
麴そのものでわが國と中國との大きなひらきは、カビの種類である。わが國の麴は周知のごとくアスペルギルス oryzae が主成分をなしているが、中國ではコウジカビもまじっているが、おもなものはケカビ *Mucor* およびクモノスカビ *Rhizopus* 群である(齋藤賢造『東洋産有用醱酵菌』一九〇九年。長西廣輔『滿鐵中央試験所報告』二輯、一九一五年)。

したがって麴の色も、わが國のは黄綠色であるが、かのはケカビによる黄色(クモノスカビは黒くなる)の胞子がいちじるしい。されば詩人はしばしばこの色を、早春の葉もでぬころの柳の花(ネコヤナギをおもいうかべる)の黄色さ(白地にうきだした雄蕊の先の花粉の色)にたとえている。たとえば、

柳色黄金嫩

李白(宮中行樂詞)

水邊楊柳麴塵絲

楊巨源(折楊柳)

上村「六郎」教授は、染色技術面からも麴「一般に「麴」の字を用う」引用者注」塵なる色が黄色であって綠色ではない

ことを強調された。

また篠田統は、前掲の「麴塵―風俗における漢字の問題」のなかで、「麴」という字は造字的に菊と相通じ、菊の色は『禮記』月令以來黄色にきまつている」とも述べる。とくに麴塵の語で「早春の葉もでぬころの柳の花の黄色さ」をたとえるとすする指摘は、きわめて注目される。この指摘はまた、すでに八七番の條で引用した清の顧宸の、「柳始めて嫩蕊を生ずるや、其の色は黄。故に『黄柳』と曰ふ。未だ葉あらずして先づ花さく」の言葉を改めて思い起こさせる。これと類似した説は、じつは宋の姚寬『西溪叢語』のなかにもみえ、麴塵の字で柳を形容するのは「其の花絮の穂に象るのみ」という。このように考えてくると、「芽を出した柳」の姿を見立てる川口・大曾根譯には、當然、疑問が生じよう。

ところで、白居易は「麴塵」の語を愛用する。早春の柳花を形容する他の用例としては、「書に代ふる詩一百韻、微之に寄す」詩(卷13)の「柳は麴塵の絲を宛ぬ」、「柳を種う三詠」詩(其三、卷32、後集卷13)の「更に想ふ 五年の後、千の條 麴塵ならん」などがある。このほか、「洛中の春遊 諸親友に呈す」詩(卷31、後集卷12)の「春の塘は水麴塵(のことし)や、「春江閑歩して張山人に贈る」詩(卷17)の「春

水 麴塵の波」などは水の形容、また「睡後の茶興に楊同州「汝土」を憶ふ」詩(卷30、後集卷4)の「沫下りて 麴塵香る」の句は、煎茶の色をたとえる。ちなみに、麴塵の語で麴塵(染色の色、黄色)、ひいては淡黄色の衣装(鞆衣)を表す用例としては、白詩(喜小樓西新柳抽條)卷33、後集卷14)の「紅桃(妾の名)の爲に麴塵と作る莫かれ」などがある。佐久節の譯注参照。愛用は、その酒好きと関連しよう。

●一〇三番 白居易「小樓の西の新柳の 條を抽きんずるを喜ぶ」漸欲拂他騎馬客、未多遮得上樓人」

○開成二年(八三七)、作者六六歳、洛陽での作(花房・朱。太子少傅分司在任。詩題の「小樓」とは、洛陽城内履道里にある自宅のなかのそれ。同年の作である「宅の西に流水(伊水の支流)有り。牆下に小樓を構ふ。臨玩の時、頗る幽趣有り。因りて歌酒を命じて、聊か以て自ら娛む。……」詩(卷33、後集卷14)にみえる「小樓」でもあろう。あるいは「西樓」ともいうらしい。

○「漸」しだいに。五二番参照。「漸欲……」(しだいに……しそうだ)の連語も散見される。六五番の注に引く張籍の詩「涼州詞」参照。

○「拂他」 『抄注』には、「或説ニハ、他字ヲ自他之他ト云義アリ。頗る僻事歟。文躰モアヒカナハサルウヘニ、『文集』ノ五言詩ニ『漸拂他』トアリ。仍他字ハ却ノ義ナリ」と述べ、大原の西修房成信上人のエピソードを引用する。

(上人) 世ヲソムキテ、江ヲモヒカケヌ(思いもかけない) 文場ニノソ「臨」メルコトアリケルニ、時ノ學生トモ、此句ヲイヒ出テ讀シケルニ、「漸欲拂他ノ騎馬ノ客」トヨミケルヲ聞テ、「カレハ、漸欲拂他トコソヨミ給(ひ)シ。『文集』ノ詩ヲハ、各々見タマハヌカ」トイワレケレハ、各々面ヲアカメテ、モノイフ人モナカリトソ。

五言のリズム(二・三)一つを考えてみても、この「他」は動詞につく助字(接尾辭)として理解すべきであろう。わが東條耕(一七九五—一八七八、號は琴臺)は、『幼學詩話』(『日本詩話叢書』第六卷所收)のなかで、こうした「他」について、

看陀他ト・憐陀・從陀・任陀・聽陀・知陀・謝陀・憎陀・泥陀・等陀・賺陀・誤陀・思陀・妬陀・爲陀・勞陀・憂陀・愁陀・嗟陀・除陀・賴陀・怪陀・疑陀・嫌陀・恐陀・贖陀・笑陀ナドモ、陀ハ助字ニテ意義ナシ。而ルヲ知ラズ、白眼看陀ル世上人ト訓點シタリ。眞ニ笑フベキ固陋ト謂フベシ。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

という。注目すべき見解である。終りに引用する詩句は、『唐詩選』『三體詩』の双方に收められる王維の有名な「盧員外象と、崔處士興宗の林亭を過ざる」詩の結句である。高木正一『唐詩選』二(朝日新聞社・文庫本)には「白眼もて他の世上の人を看る」と讀み、

「他」は、英語の定冠詞または不定冠詞に似た言葉で、現代中國語でいうなら「那」または「那個」にあたる。

と説明する。佐藤保ほか『唐詩選』下(學智研究社、一九八六)も高木説と同じ讀み方をし、「他」は「彼」「那」に同じ三人稱の指示代名詞とする⁽⁴³⁾。しかし、筆者には、『抄注』の「却ノ義」説や東條耕の「助字ニテ意義ナシ」とする説のほうが正しいと思われる。太田辰夫『中國語歴史文法』は、「三人稱代名詞の助動詞化」の條(一一八・九頁)で、こうした「他」の類似用法を現代の老舍『駱駝祥子』などからとりあげ⁽⁴⁴⁾、「前の單音節動詞につづけて發音され、その間に息休止がないから、音聲的にいってもこれを代名詞とすることには無理がある」とし、「そのことに對する無關心、無責任、輕視の語氣をあらわすにとどまり、代名詞として指示するところはない」とされた。そしてさらに次のようにいう。

《他》が無關心の語氣を示すことは古く唐代からある。

これはおそらく、《他》が三人稱となるまえに他稱であつたことより、意味が變化したものであろう。

白眼看他世上人（王維詩）（白眼もて世の俗人をみる）

戀他朝市求何事？（白居易詩）（都會に戀々として何を求め

るのか）

この説をうけて、志村良治「中世中國語の語法と語彙」⁽⁴⁵⁾のなかにも、前掲の王維詩などをあげて、「前の動詞につき、助動詞的に用いられ、動作に對する無關心を示す」用法だとする。この意味で、『集注』に引く一説に「拂他はしりぞけんとよむ」とあるのが興味深い。ただし、同論文はまた、代名詞の「他」は、「渠」「你」などともに「從他」「遮渠」「任你」と接尾辭化する。これは強意や親近感をあらわすもので、すでに實義は失われる方向にある、とする。要するに、助字「他」の用法には、無關心・無責任・輕視などのニュアンスを添える場合と、そうではなく、ただリズムを整えるにすぎない場合の二種があると考えてよいだろう。こうした助字の「他」は、白詩に散見する。太田辰夫の指摘する用例（『想歸田園』卷25、後集卷8）以外にも、「照他、幾許人腸斷」^(補a)（『中秋月』卷16）、「無情亦任他春去」^(補a)（『早夏曉興、贈夢得』卷34、後集卷15）、「不用隨他年少人」（『早春招張賓客』卷31）、「老

過占他、藍尾酒」（『喜入新年自詠』卷36、後集卷17）などがある。ちなみに、鹽見邦彦『臨濟錄』助字考（『禪研究所紀要』愛知學院大學）六・七合併號、一九七六）には、これと類似した「他」について、

名詞に冠せられる軽い助字で、「他^{かれ}」とか「他^{かれ}」などという第三人稱の代詞ではない。

と述べる。しかし、唐詩の用例は『臨濟錄』とはやや異なり、動詞に添える軽い助字として理解すべきであろう。

○「遮得」⁽⁴⁶⁾「得」には獲得・實現・可能の用法があるが、ここは可能を示す助字（接尾辭）。「可能助動詞としての『得』は唐代から多く用いられ」（太田辰夫『中國語歴史文法』二三一頁）、二五四番の白詩「不醉給中爭去得」も同例である。

〔注〕

(1) 朱金城『白居易集箋校』（全六冊、上海古籍出版社、一九八八）の略稱。底本は明の馬元調刊本。なお朱金城『白居易年譜』に未繫年の詩や、繫年に異同がある場合のみ、朱『箋校』と注記する。それ以外は、「朱」で兩著を含ませる。

(2) 京都府立大學學術報告『人文』十八號、一九六六年所收。

(3) 日本大學人文科學研究所『研究紀要』十八、一九七六年。

- (4) 『中國文學史研究』(櫻楓社、一九七四)所收。
- (5) 『月輪山詞論集』(中華書局、一九七九)所收。
- (6) なお蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』第四篇の「殘」の條参照(増訂本・第四次増訂本)。
- (7) 『國學院雜誌』八二卷十二號、一九八一。
- (8) 王拾遺「元稹主要交游考(上)」(『寧夏大學學報』「社會科學版」一九八三年第一期)参照。
- (9) 拙稿「唐代詩人新疑年録」(1)(弘前大學人文學部『文經論叢』第三卷第三號、一九八八年)参照。
- (10) 洛陽城内における牛僧孺の邸宅は歸仁里にあり、「館字清華、竹林幽邃」といわれる(『舊唐書』卷一二二の牛僧孺傳)。
- (11) 『唐人小說研究』四集、藝文印書館、一九七八年所收。
- (12) 『詩語の諸相―唐詩ノート』(研文出版、一九八一)所收。
- (13) 王先謙『釋名疏證補』の卷末に付す『釋名補遺』による。
- (14) 韋莊「楚行吟」詩に「章華臺下草如烟」とある。また韋莊の「春陌二首」(其二)には、「嫩煙輕染柳絲黃」という「嫩煙」の語もある。また「煙草」の語は、李白の「鳴皋歌、奉餞從翁清歸五崖山居」詩などに見える。
- (15) 傅璇琮「錢起考」には、錢起の進士及第の年を天寶九載とする新説を提出する。しかし、謝海平の前掲論文は、『永樂大典』卷一(二の誤り)三六八に引く『蘇州府志・貢舉題名門』進士の條などを引いて、天寶十載、李麟が知貢舉のとき『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)
- (16) 中島敏夫・齊藤茂『唐詩選』中(學習研究社、一九八四)五三四頁参照。
- (17) 程千帆『唐代進士行卷與文學』(上海古籍出版社、一九八〇)。「凱風社、一九八六」もある)参照。また村上哲見「科擧の話」も参考になる。
- (18) 徐松『登科記考』卷十八。
- (19) 陝西人民出版社、一九八〇年刊。
- (20) 都に置かれた宿驛「都亭驛」は、公務を帯びた使者や官吏が盛んに利用するところであり、皇城の南、朱雀街の西にある通化坊(善和坊の南)にあった。ただし、この坊名は北の善和坊とともに、従来、殖業・光祿とされることが多かった。これは「唐兩京城防考」の憶測に従ったものであるが、福山敏男「校注兩京新記卷第三及び解説」(福山敏男著作集六『中國建築と金石文の研究』中央公論美術出版刊所收)の説により、殖業は通化、光祿は善和の訛と見なす。この新説は、今日すでに通説となる。なお辛德勇「隋唐兩京叢考」上篇「七 善和・通化與光祿・殖業四坊」(一九八七年)参照。ちなみに、同論文は、筑波大學の妹尾達彦助教の御厚意により参照することができた。
- (21) 小島憲之「上代文獻解釋への小さき徑」(『國語・國文』第

の及第とする従来の説を支持する。筆者は謝海平の説にしたがう。

- 十五卷十號、一九四六）参照。
- (22) 曾益等撰『溫飛卿詩集箋注』卷九には、この句の注に、錢起の「龍池柳色雨中深」を引く。
- (23) 白居易が忠州に到着したのは、元和十四年の三月末のことであった。
- (24) 『唐詩の風土』九五頁以下、『長安・洛陽物語』二四一頁以下を参照。
- (25) 柳花と葉の發生順序に異同があるのは、おそらく、柳の生える土地の氣候や風土の差異と關連しよう。
- (26) 五代・李煜「柳枝」に「強ひて煙、穗を垂れて人の頭を拂ふ」とある。
- (27) 日本風俗史學會『風俗』二・三合併號、一九六一年所收。
- (28) 『中國食物史の研究』八坂書房、一九七八年所收。
- (29) 『六注』には、「下句ハ昔シヨリ柳ハ煙ニ寄（セ）テ作ル。故ニ上句ハ本ヨリ梅ヲ雪ニ寄（ス）ル也」とある。
- (30) 晩春の柳の場合、薛濤「和李書記席上見贈」に、「借問風光爲誰麗、萬條絲柳翠烟深」などと歌われる。
- (31) 母丁香の「母」は未熟の果實の意。ちなみに、田中靜一編著『中國食品事典』（書籍文物流通會、一九七〇）の「丁香香」の條には、「丁香を蒸溜してとつたものが丁香香でグリーン・石鹼・アルコールによく混じる性質があるところから化粧品、香水の香りによく使用され、菓子・洋酒類にも使用される。香りの主成分はユーゲノールである。昔宮廷に仕え
- た人が口臭を消すために口中で嚙んだ香料はこれである」という。
- (32) 『夢溪筆談』卷二六、藥議の條（胡道靜『校證』本では四八一番）参照。
- (33) ちなみに、『六注』には、「斝せんざん檀ノ實也。此ノ木ノ實、鶏ノ舌ニ似ル故ニ、鶏舌香ト云也」とある。
- (34) 『唐詩の風土』三八・三九頁参照。
- (35) 顧學頡・王學奇『元曲釋詞』二（中國社會科學出版社、一九八四）の「六出」の條参照。
- (36) 小野勝年『入唐求法行歴の研究—智證大師圓珍篇』下（法藏館、一九八二）二九七頁前後参照。ちなみに、朱金城『箋校』卷28、「登天宮閣」詩の箋には、「天宮閣」を「洛陽天宮寺閣」云々と述べるが、寺の場所などには全く言及していない。
- (37) 『唐詩の風土』八六頁以下、『長安・洛陽物語』二二三頁以下参照。
- (38) いま、陳友琴『白居易卷』（古典文學研究資料彙編）に引く涵芬樓秘笈本にいう、「唐人詠柳、使麴塵字者極多。『禮記』月令《薦鞠衣於上帝、告桑事》。注云、《如鞠塵色》。『周禮』內司服《鞠衣》。鄭司農《女》云、《鞠衣、黃桑服也。色如鞠塵、象桑葉始生》。此用之柳、又象其花絮之穗耳。明の胡震亨『唐音癸籤』卷20、鞠塵の條にも引かれる。鞠塵は染色の色（黄色）をいい、麴塵の意と通ずる。鞠の字はまた

「菊」と言通する。學津討原本『西溪叢語』卷上では、「鞠塵」の字を用いるべきだとする。

(39) 白居易「宅西有流水、牆下構小樓、…… 偶題五絕」(其二)に、「水色波文何所似、麴塵羅帶一條斜」とある(卷33、後集卷14)。

(40) 『唐兩京城坊考』卷五に、「白居易宅在履道里西門。宅西墻下臨伊水渠。渠又周其宅之北」とある。

(41) 白居易「西樓獨立」詩(卷34、後集卷15)の西樓と同じであらう。

(42) 「近此大原ノ西修房成信上人ト云人有キ」によれば、成信上人(未詳)の事跡がわかりさえすれば、『抄注』作成の時代もより明瞭化する。『抄注』の撰者は「大原」に住んでいたらしい。ちなみに、このエピソードは、『集注』にも見えない。

(43) 前野直彬『唐詩選』下(岩波文庫)には、「他は三人稱代名詞。ここでは下の『世上の人』をさす。直譯すれば『それを見る』と言っておいて、『それ』の内容をあとから『世上の人』と言い直した形になる」というが、誤りであらう。ちなみに、著者未詳『叢園雜話』(『續日本隨筆大成』4所收)にいう、〈服部〉南郭の「他の世上の人を看る」と點を付「け」られたるを、「大宰」春臺、「看他す」と點付「く」べき由云はれしに、「看他」は俗語にて、にらみ見るきみ(氣味)なれば、随分さう付「く」るがよけれど、和語にて

『和漢朗詠集』所收唐詩注釈補訂(植木)

「他の世上の人を看る」と讀めば、句も舒やかに、詩を讀「む」の法なり、と云はれし由」と。

(44) たとえば、「第一天沒拉她什麼錢」(最初の日はひいてもほとんど金にならなかった)や、「他得走、想好了主意、給他個不辭而別」(かれは去らなければならぬ、かんがえがきまると、だまって出てきてやった)、「管他是誰的房呢」(誰の家だろうとかまうもんか)など。

(45) 『中國中世語法史研究』(三冬社、一九八四)の一〇二頁参照。

(46) 内田道夫「中世中國語における「得」の特質について」(『東北大學文學部研究年報』第二號、一九五二)や、詹滿江「唐詩における口語表現―動詞に後置する助辭をめぐって」(慶應義塾大學『藝文研究』第五一號所收)、玄幸子「敦煌變文に於けるV得について」(『中國語學』二二二號、一九八五)など参照。

〔補注〕

わが江戸時代における助字・虛字研究の白眉、『文語解』『詩語解』『詩家推蔽』の三書は、從來、ともに釋大典撰とされてきた。しかし、正しくは、『文語解』は宇野明霞(名は鼎、字は士新、明霞はその號、一六九八―一七四五)撰、釋大典撰補、『詩語解』は宇野明霞撰、『詩家推蔽』は宇野明霞原撰、釋大典撰補、とすべきことが明らかになった。詳しくは、岩見輝彦「宇野明霞の『語辭解』について」(『汲古』第五號、一九八

中國詩文論叢 第八集

四年)、徳田武「宇野明霞の訓法の悲劇」(『新しい漢文教育』第八號、一九八九年)参照。いま、この説に従う。

〔補 a〕

この句と對をなす下句は、「不醉爭銷得書長」である。つまり、「任他」は「銷得」と對應する。

〔補 b〕

南宋版『王荊公唐百家詩選』(古逸叢書三編の二三、中華書局影印)卷八には、「贈閣下閤舍人」に作る。また、『文苑英華』卷二五三(宋版の部分)にも、「闕下贈閣舍人」に作る。

〔補 c〕

伊藤正義・黒田彰編著『和漢朗詠集古注釋集成』第三卷(大學堂書店、一九八九年)に收める靜嘉堂文庫藏、室町末期書寫の『和漢朗詠集和談鈔』(詩注)の翻刻によれば、この二句は、逸詩の「腰句」であるという。腰句とは、律詩の頸聯(第五・六句)を指す。ちなみに、この『古注釋集成』の刊行は、平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』三冊(同朋舎、一九八九年)のそれとともに、注釋研究の面でもきわめて有用であり、その完結が望まれる(第一・二巻は未刊)。また、拙稿(一)の三頁において、「注者未詳」とした永青文庫本『和漢朗詠抄注』は、前掲の『古注釋集成』第三卷の解題には、鎌倉初期頃に成立した永濟注系本の一つとする。